

ESSAY

あこがれのアイガー北壁とモンブラン、 オーストリア、スイス紀行

炭山嘉伸

東邦大学第三外科



アイガー峰

昨年（1998年）9月ウィーンにおいて、World Congress of Gastroenterologyが開かれ私も女房を伴って参加した。国際学会に女房を伴って参加したのは、今回がはじめてであったこともあり、このさい開業医として日頃私を支えてくれる女房孝行のつもりで、ウィーンからスイスのグリンデルワルド、ジュネーブへと足を延ばし、遅い夏休み紀行となった。

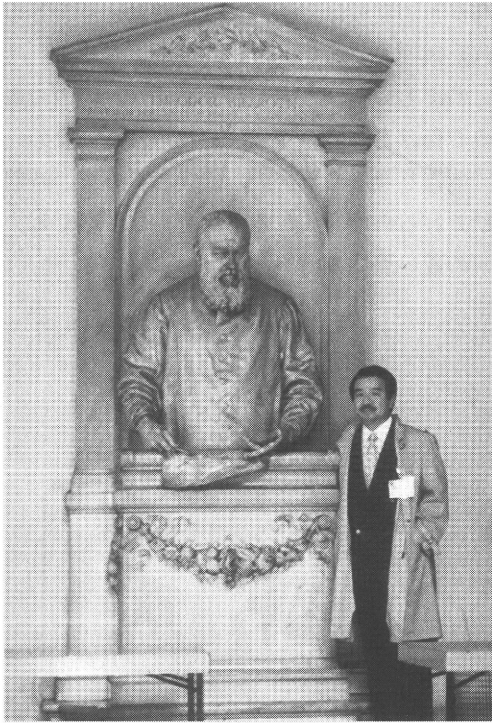
ウィーンでは学会へ参加するとともに、音楽の都として数多くの名音楽家を輩出したウィーンの町の歴史と芸術の雰囲気や大いに堪能した。

ウィーンは小さな町だが石畳と重厚な建造物がよく似合う中世の歴史を感じさせる落ち

着いた町で、モーツアルト、ベートーベン、シューベルト、ヨハン・シュトラウスとウィーンで活躍した名音楽家ゆかりの地を訪ねたり、700年にわたってヨーロッパの歴史を支配したハプスブルグ王朝の王宮や庭園など、町全体が博物館といった、まさしく芸術のおいあふれる町だった。

石畳をひづめの音も高らかに馬車で巡った市内観光は、忘れられない思い出となった。

また、ウィーン大学を訪れ、胃切除術後再建法で有名な Billroth 氏の銅像の前で写真を撮ってきた。あの有名な外科医が、そして名だたる音楽家がこんな小さな町から輩出したことが不思議な気がするのは、私だけだろうか！



Billroth 像の前にて (ウィーン)

さて、今回の大きな旅の目的は、ウィーンでの学会参加の他に、あこがれのヨーロッパアルプスの名峰を訪れることであった。

私たちはウィーンを後にして空路チューリッヒへ入り、チューリッヒよりインターラーケン経由で、アイガー(3970米)、メンヒ(4099米)、ユングフラウ(4158米)の峰々がそびえたつふもとの町のグリンデルワルドに到着した。

グリンデルワルドは、旅行者に人気の高いアルペンリゾートとして知られた小さな村で、放牧された牛や羊がのんびりと草を食べる風景のすぐ後ろには、雪をかぶった4000米級の峰々がまるで村に覆いかぶさっているかのごとく、そびえたつ様は息のむ風景で、私の想像を絶するものだった。

私が何故アイガーにあこがれるかというと、

子供の頃見たニュース映画で冬のアイガー北壁の登頂を目指した登山家の遭難の風景が映し出されたのだが、その時圧倒的な迫力でそそり立つアイガー北壁は、まさしく私にとって忘れがたい絶壁となり、強烈な印象となっていつまでも脳裏をよぎったものだった。

私たちはアイガーの真下のレジーナホテルにそそくさと荷をおろし、さっそくアイガーの反対側の山のロープウェイに乗り、アイガー、メンヒ、ユングフラウの雄姿を眺めに行った。

幸いにしてその日は、好天に恵まれあこがれのアイガーを目のあたりにして私は、いたく興奮していた。

私の目に映ったアイガーは、頂上近くまで雪がへばりつくのを拒むかのように、岩肌をむき出しにした荒々しい人を寄せ付けぬ厳しいたたずまいで、やはりあこがれの岩壁そのものだった。

雄大なその姿を、私は飽きることなくいつまでもいつまでも眺めていた。

翌日は、朝からグリンデルワルドの村はあいにくの激しい雨で、山は雪であるとわかっていて登山電車でアイガー登山を試みたが、やはり山の上は猛吹雪で山の天候の激変ぶりを身をもって知らされ、あえなく登山をあきらめたが、電車から眺める間近の北壁はよりいっそうの迫力で迫ってきた。

翌日私たちは、予定通りグリンデルワルドを後にして、次の目的地のレマン湖のほとりのジュネーブへ足を延ばし、さらにフランスのシャモニーから、ヨーロッパの最高峰、モンブラン(4807米)を間近に見るエギューイ・デュ・ミディ(3842米)へゴンドラで登った。

このゴンドラは約15分で一気に3842米まで登るため、私は高山病の症状である、めま

い、動悸、息切れに襲われはじめて高山病の恐ろしさも経験することができた。

しかし、モンブランやグランドジョラス、モンテローザ、マッターホルンが、本来なら見えるであろうこのエギュイ・デュ・ミディもあいにくの吹雪のため、ほとんど見ることができず（ちらりとモンブランの頂上は見えた）世界でも最高の展望台といわれるこの

峰からの展望は、山の天候の厳しさを教えられたにとどまった。

残念といえば残念だが、あこがれの山の麓まで行けた今回の旅は、忘れられない旅の一つであり今度もう一度、天候の良い夏の時期にこれらの地を訪れることを期して私たち夫婦の遅い夏休みは終わった。